

メキシコにおける前衛主義 「同時代人」
Contemporaneos誌を中心に

著者	鼓 宗
雑誌名	関西大学外国語教育研究
巻	5
ページ	69-80
発行年	2003-03
その他のタイトル	Poesia vanguardista en Mexico: la generacion de la revista "Contemporaneos"
URL	http://hdl.handle.net/10112/1297

メキシコにおける前衛主義

——「同時代人」*Contemporáneos* 誌を中心に——

Poesía vanguardista en México: la generación de la revista “Contemporáneos”

鼓 宗
TSUZUMI Shu

A fines de la década de 1920 se publicó una revista, cuyo director era Bernardo Ortiz de Montellano, poeta y crítico. La revista se llama “Contemporáneos”. Sirvió de promotor en el proceso de echar raíces de la poesía y prosa vanguardistas en México. En ella colaboraron no pocos poetas, escritores y críticos, que son autores de obras sumamente importantes de la literatura mexicana. En la nómina de los colaboradores se encuentran los nombres de Javier Villaurtia, Carlos Pellicer, Jaime Torres Bodet y Salvador Novo entre otros, quienes se reunieron en la Escuela Nacional Preparatoria situada en la ciudad de México. Después de desaparecer la revista se comienza a denominar a estos poetas y escritores “la generación” o “el grupo” de “Contemporáneos”. Los artículos que salieron en las páginas de “Contemporáneos” y los escritos de sus colaboradores estimularon a otros escritores y poetas mexicanos; como resultado, el vanguardismo se arraigó en la literatura mexicana. En este ensayo tratamos de perfilar las figuras del grupo y hacer una brevíssima reflexión sobre el rumbo que tomó la generación de “Contemporáneos”.

キーワード

ラテンアメリカ文学 Latin American literature、メキシコ文学 Mexican literature、前衛主義 avant-garde、文芸誌 literary magazine、「同時代人」“Contemporáneos”

はじめに

20世紀初頭から中葉にかけて、メキシコに前衛芸術が根づいたことについては、いくつかの原因が考えられる。ファン・タブラダ Juan Tablada (1871–1945) に代表される革新的な意識をもった詩人たちがすぐれた実験的作品を送り出したこと、国家的プロジェクトとしての壁画運動が成功したこと、マヌエル・マプレス＝アルセ Manuel Maples Arce (1898–1981) が提唱したエストリデンティスモのような芸術運動が起こったことがそれである。もうひとつ大きな影響を及ぼしたのは、新しい文芸雑誌の創刊が相継いだことだった。シュルレアリスム運動の推進者たちが出した機関紙の例を見るまでもなく、印刷技術が目覚ましい発展をとげた19世紀末か

ら20世紀前半にかけて、さまざまな芸術運動において雑誌というメディアが果たした役割は見逃せない。たとえば、スペインではオルテガ＝イ＝ガセー主宰の「西欧評論」*Revista de Occidente*、アルゼンチンではビクトリア・オカンボ編集の「南方」*Sur*、さらにはカナリア諸島の前衛主義者によって発行された「芸術新報」*Gasetta de arte* や、チリのブラウリオ・アレナスがエンリケ・ゴメス＝コレアラと出した「マンドラゴラ」*Mandrágora* という雑誌が、とりわけヨーロッパの新しい文学や芸術、思想をそれぞれの地域に広めることに貢献した。メキシコにおいてもさまざまな雑誌が創刊されたが、なかでも注目に値するのは「同時代人」*Contemporáneos* (1928-1931) という文芸誌である。同誌の発行に関わった詩人たちは「同時代人」のグループとして、メキシコに前衛文学を興こす中心的な存在となった。

イスマノアメリカのほとんど全域において前衛主義が台頭した時代にあつて、「同時代人」誌は、のちに同誌のアンソロジー¹⁾を編んだマヌエル・ドゥラン Manuel Durán の言葉を借りれば、成熟した前衛主義文学の〈るつぼ〉と化した。本稿では、「同時代人」創刊当時の思想的背景やその中心となった作家や詩人たちに光を当てることで、上記のグループがどのような形でメキシコに前衛的な文学の傾向を導入しようとしたのかを検証してみたい。

1. 「同時代人」創刊の前夜

「同時代人」誌が存続した期間は3年余りと短い。1928年に創刊され、1931年には休刊となっている。しかし「同時代人」誌以前にも、同誌を支えることになる何人かが集まり、「ガマ」*Gladios* (1916)、「サネバンク」*San-Ev-Ank* (1918)、「現代のメキシコ」*México Moderno* 1920-1923)、「方陣」*La Falange* (1922-1923)、「アンテナ」*Antena* (1924)、「ユリシーズ」*Ulises* (1927-1928) といった雑誌を発行していた。また「同時代人」誌がヨーロッパの新しい文芸思潮の紹介に努め、それに触発された作品を発表した結果、オクタビオ・パス Octavio Paz (1914-1998) をはじめとする次世代のすぐれた詩人や作家たちが登場し、「仕事場」*Taller* 誌や「放蕩息子」*Hijo Pródigo* 誌という新しい傾向をもつ文芸誌も生まれた。こうした事情から、「同時代人」誌は、3年間にわたって、それ自体としてメキシコ文学に影響を及ぼしただけではなく、ひとつの世代を形づくったと見ることができる。「同時代人」誌が後の世代に何をもたらしたかを点検するために、まず、同誌が創刊される以前のメキシコの文学的・思想的状況を振り返ることにしたい。

19世紀メキシコの支配者層のあいだでもはやされた思想は、主にフランスから移入された実証主義哲学であった。知的エリートによる支配を容認する実証主義哲学は、ポルフィリオ・ディアス Porfirio Díaz (1830-1915) 将軍が武装蜂起し大統領職に就いた1876年から、革命が勃発する1911年までの永きにわたって、メキシコ政治の行方を決定するよりどころとなった。そして、実証主義哲学の弊害が顕著になる1906年、政府の要職を歴任したアルフォンソ・クラ

ビト Alfonso Cravito (1883-1955) や、ジャーナリストとして活躍すると同時に、大学で教鞭をとっていたルイス・カスティジョ = レドン Luis Castillo Ledón (1879-1944) らの手で「現代の生气」*Savia Moderna* 誌が世に出た。彼らはこの雑誌を通じてメキシコの歴史の再確認に努め、いまでは〈独立の父〉と仰がれているミゲル・イダルゴ Miguel Hidalgo y Costilla (1753-1811) のような過去の知られざる偉人の伝記を発掘して国民に紹介し、愛国的な精神を高めようとした。

さらに1909年頃、「現代の生气」誌に刺激を受けて、実証主義による政治支配に異を唱えるグループが誕生した。〈1910年の世代〉と呼ばれるこの一派は、後に〈青年文芸協会〉派 *Ateneo de Juventud* を名乗り、メキシコの思想の核となるべき新しい哲学を探し求めた。〈青年文芸協会〉派には、次のような若い知識人たちが参加した。メキシコ国立大学大学院で最初に哲学課程の教鞭をとったアントニオ・カソ Antonio Caso (1883-1946)。批評家として活躍し、スペイン語詩についてもっとも信頼のできる評論の数々をものしたペドロ・エンリケス = ウレーニャ Pedro Henríquez Ureña (1884-1946)。ほかのメンバーよりも少し年長の詩人エンリケ・ゴンサレス = マルティネス Enrique González Martínez (1871-1952) は、最初にモデルニスモからの脱却をなし、フランス詩の翻訳も手がけた。いずれもメキシコの文学と思想の発展に寄与した人物たちである。

しかし、このグループで誰よりも傑出していたのは、メキシコ随一の碩学として知られるアルフォンソ・レジェス Alfonso Reyes と、メキシコ革命後にアルバロ・オブregon Alvar Obregón 政権下 (1920-1924) で公共教育大臣を務めたホセ・バスコンセロス José Vasconcelos (1881-1959) の二人であろう。とりわけバスコンセロスは、新しい形の教育と文化のプログラムを実行し、後に続く世代の作家や芸術家たちに広く自由な活躍の場を与えた。

これら〈青年文芸協会〉派の作家たちの、人文主義的、普遍主義的な視点に根ざした汎アメリカ主義と、それと裏腹の関係にあるメキシコ主義は、「同時代人」誌が追い求めたコスモポリタニズムに少なからず影響を与えた。ことにバスコンセロスが公共教育省でおこなった文化水準向上プロジェクトでは、ハイメ・トーレス = ボデー Jaime Torres Bodet (1902-1974) や、カルロス・ペジセル Carlos Pellicer (1899-1977) という、やがて同誌の執筆陣の中核となる人々が協力している。

一方、1921年から1927年にかけて存続したエストリデンティスモを標榜するマプレス = アルセほかは、過激な前衛主義的主張をくりひろげ、メキシコの文学者たちを刺激した。まさにメキシコ前衛主義のいちばんの担い手であった。「同時代人」誌の寄稿者は、マプレス = アルセと親交があったサルバドル・ノボ Salvador Novo (1904-1974) を別にすれば、エストリデンティスモのグループと重ならないが、エストリデンティスモの機関誌「現代」*Actual* と、「同時代人」誌は、メキシコ文学に新しい地平を切り開くことになった。

しかし、「同時代人」誌を待っていたのは、20世紀初頭のパリやバルセロナのように、知的冒険

を歓迎するムードではなく、メキシコ革命後の民族主義的な空気であった。革命は1910年に勃発、10年にわたって動乱が続き、以後、1920年代から1930年代の前半にかけてさまざまな改革が実現した。革命の余韻がさめやらぬ、愛国的な熱気につつまれたこの時期は、審美的価値を至上のものとする「同時代人」誌にとっては逆風の時代だったといっている。

2. 「同時代人」誌の創刊

「同時代人」誌のグループの中核は、国立予備学校で顔を合わせた数名の詩人たちであった。まず年齢の近さが彼らを親しく結びつけたのである。予備学校を卒業後、高等専門学校や国立大学法学部に進学してからも交遊は続き、きずなは強まった。彼らが、〈青年文芸協会〉派のカソヤゴンサレス＝マルティネスに感化されたのは大学入学後のことだった。その頃、トーレス＝ボデーとベルナルド・オルティス＝デ＝モンテジャノ Bernardo Ortiz de Montellano (1899-1949) は、〈新青年文芸協会〉派 *Nuevo Ateneo de la Juventud* を結成している。1921年にはノボヤハビエル・ビジャウルティア Xavier Villaurrutia (1903-1950) が加わった。やがて、彼らはさまざまな雑誌や新聞に作品を発表すると同時に、「現代のメキシコ」誌や「方陣」誌を創刊した。さらに1927年5月から翌2月までは、ノボ、ビジャウルティア、クエスタ、オーエンらが中心となり、「ユリシーズ」を出した。いずれも短命に終わったが、二十世紀前半のメキシコ文学において決定的な役割を果たすことになった。ことに「ユリシーズ」誌は、新しい美学の創造を目指す姿勢といい上述した執筆陣といい、まさに「同時代人」誌の先触れであった。

1928年6月、オルティス＝デ＝モンテジャノが、首都メキシコ市において「同時代人」の創刊号を発行した。トーレス＝ボデーを主筆に据えたこの雑誌は、1931年12月まで約3年半にわたって出版された。一世代前の前衛主義運動であるエストリデンティスモが、既存の美学を真っ向から否定し、すべてを覆そうという過激さをもち合わせたのにたいして、「同時代人」グループは、反モデルニスモの基本的な姿勢こそ崩さなかったものの、先達の詩人たちの仕事自体は尊重した。とくに、ゴンサレス＝マルティネスやラモン・ロペス＝ベラルデ Ramón López Veralde (1888-1921)、それに、タブラダらといった詩人たちには、特別の敬意が払われた。

「同時代人」誌には、実験的な要素をはらむ詩や小説や戯曲、そして芸術を活性化させようという意気込みに満ちた論文が次々に発表された。寄稿者たちは厳しい美学上の規範を自らに課したが、そうした傾向は時として一部の者らを寡作に追いこむことになった。とくに詩人たちは前衛主義へ傾倒しただけでなく、バロック詩のような古典を再評価したり、民衆詩を取りあげ、先住民文化に光をあてたりした。それは、文化の創造が、新奇なるものの導入によって達成されるだけでなく、伝統的なものの延長線上におこなわれる、と考えていたことの現れ

である。そのため、新しい思潮に基づいた作品が古い枠組みを出ていないという皮肉な事態も生まれた。しかし、「同時代人」誌による詩の革新の試みには、パスが指摘するとおり²⁾、直前の過去にたいする批判とその裏返しである伝統への帰属意識、すなわち伝統の継承と断絶の繰り返しという近代詩史の特徴が顕著に見られることは否定しがたい事実である。

3. 「同時代人」の詩人たち

先述したように、「同時代人」誌グループの母体は、すでに1920年頃、メキシコ市の国立予備学校で形づくられていた。ホセ・ゴロスティサ José Gorostiza (1901-1973)、ビジャウルティア、トーレス = ボデー、ノボ、オルティス = デ = モンテジャノ、ヒルベルト・オーエン、ホルヘ・クエスタ Jorge Cuesta (1903-1942)、エンリケ・ゴンサレス = ロホ Enrique González Rojo (1899-1937)、カルロス・ペジセル、エリアス・ナンディノ Elías Nandino (1903-) といった面々がそうだった。いずれも、20世紀前半のメキシコ詩壇で活躍した人物ばかりである。彼らは、世代や気質によって3つのグループに分けられる。すなわち、ゴロスティサ、オルティス = デ = モンテジャノ、トーレス = ボデー、ゴンサレス = ロホのグループがひとつと、ビジャウルティアとノボのグループ、そして、クエスタとヒルベルト・オーエン Gilberto Owen (1905-1952) のグループにはかならない³⁾。ペジセルだけがそれぞれのグループの各々と知遇があるにもかかわらず、一匹狼的な道をたどり、いずれのグループにも属さなかった。

「同時代人」グループは、卓越した詩人を擁した。ペジセルもメキシコの近代詩人を代表するひとりだが、ほかのメンバーよりも遅れて参加した彼の作風は、同時代的と呼ぶには、あまりにも伝統的で古典的な技法にかたよりすぎていた。誌名どおり同時代的であったのは、たとえば、以下に挙げるような詩人たちであろう。

オルティス = デ = モンテジャノは若い頃から文学に強い関心を抱き、執筆活動をおこなっていたが、「同時代人」誌の1928年の創刊から1931年の休刊まで編集に携わった。コロンブスのアメリカ大陸到達以前の世界を幻想的かつ神秘的に描き出したオルティス = デ = モンテジャノの作品には、ポール・ヴァレリーの影響とともに、シュルレアリスムやフロイトに感化された形跡がうかがえる。たとえば、1931年の『初めての夢』 *Primer sueño* は、実際にはまだ面識のなかったスペイン詩人フェデリコ・ガルシア = ロルカ Federico García Lorca (1898-1936) との架空の会見と、5年後におとずれる彼の死の予感をつづったものである。また先住民が遺した詩に寄せた関心は、『ポボル・ヴフ』や『チラム・バラムの書』に見られるナワトル語の詩を下敷きにした戯曲『大帽子』 *El sombrero* (1931) や、『サロメの首』 *La cabeza de Salomé* (1943) を読むとわかる。こうした傾向は「同時代人」誌に寄稿していた時代から見られたもので、マリアノ・ロハス Mariano Rojas が途中まで進めていたナワトル語の詩の翻訳を完成させると、同誌に発表した。

「同時代人」誌の主宰者ハイメ・トーレス＝ボデーは、文学批評にも手を染め、つねにメキシコ詩壇において重要な位置を占めていた。メキシコ大使としてフランスに赴任したり、二度にわたり文部教育大臣を務めたり、要職をまっとうできる俊英であった。モデルニスモを標榜した『熱狂』*Fervor* (1918) は、スペイン語圏における象徴主義的な詩集という色彩が濃い。それに、シュルレアリスム的な要素が取りこまれた『追放』*Destierro* (1930) や、さらに、それらの延長上にあつて円熟味を示す『納骨堂』*Cripta* (1937) という詩集も出している。それぞれにおいてトーレス＝ボデーが目指したのは、前衛主義的な詩風と伝統的な詩風の調和であった。

ハビエル・ビジャウルティアは「同時代人」誌の活動に関わるまで、弁護士を志し、国立予備学校で法律を学んだ。そこには、ノボヤトーレス＝ボデー、ホルヘ・クエスタが同窓生としていたが、彼らとの交際が親密になるにつれて、勉学を放棄し、ペン一本で身を立てる決心をした。1927年、「同時代人」の前身となる「ユリシーズ」誌が出版に漕ぎつけられたのは、ビジャウルティアの功績にほかならない。また、「ユリシーズ」*Ulises* と「オリエンタシオン」*Orientación* という二つのグループを通じての活動は、メキシコの演劇に新風を吹き込んだ。ビジャウルティアは海外の新しい戯曲を積極的に紹介し、実験的な作品が上演される道を開いた。「同時代人」誌が休刊になると、アメリカにわたりイエール大学で演劇を研究した。帰国後はUNAM (メキシコ自治大学) の文学の講座で教鞭をとる一方、INBA (国立美術院) の劇場監督を務めた。さらに「メキシコ文芸」*Letras de México*、「放蕩息子」、「アンテナ」、「美術手帖」*Revista de Bellas Artes* (1960-1964) といった「同時代人」誌の目指す方向を受け継いだ文芸誌の発行にも関わった。

ビジャウルティアは「同時代人」誌に寄稿した詩人のなかで最良の詩人と見なされている。当初、ビジャウルティアは、スペイン語圏におけるモデルニスモの創始者のひとり、ロペス＝ベラルデの作風に傾倒した。その影響から脱却したあとは、韻文から装飾的なものを取り去ろうとする〈純粹詩〉を提唱したスペインの詩人、ファン・ラモン・ヒメネス Juan Ramón Jiménez (1881-1958) への私淑を示す作品を書きはじめた。ビジャウルティアの代表的な詩集とされる『死の郷愁』*Nostalgia de muerte* では、生の終焉としての死という概念を象徴的なものとして捉えている。

詩人ビジャウルティアの影響はほかの同人にも及んだ。同誌に多くの作品を発表したエリアス・ナンディノは、その点をはっきり認めている。「同時代人」グループらしく、愛や、孤独や、死をめぐる個人にかかわる主題を取り上げた。ナンディノは「同時代人」誌が休刊になったあと、学校で文学を教えるかたわらで、「季節」*Estaciones* (1956-1960) 誌や「美術手帖」誌の編集長を務めた。

ホセ・ゴロスティサも、同世代のラテンアメリカ詩人の例に洩れず、ニカラグア出身のコモポリタ的な詩人、ルベン・ダリオ *Ruben Darío* (1867-1916) の影響から出発した。ゴロ

ステイサは、「同時代人」誌における中心人物だったが、ほかの詩人たちに比べると寡作であった。しかし、作品の出来という点ではビジャウルティアにひけをとらなかった。代表作『果てしなき死』*Muerte sin fin* (1939) は、スペイン語詩においてエリオットの『荒地』に比肩しうる重要な作品であると見られている⁴⁾。

アイルランド系の先祖をもつヒルベルト・オーエンも、ダリオの影響を受けている。ステファン・マラルメ、T・S・エリオット、フアン・ラモン・ヒメネスといった詩人たちからも多くを吸収した。作品では、現代人の自我を探求し、自らを受け入れてくれない世界にたいして感じる、孤独や心の荒廃、反抗精神を詩に託した。

ホルヘ・クエスタは、実生活において不幸な目にあっただけで精神病をわずらい2度の入院を強いられたあとで、1942年に自ら命を絶った。短い生涯に遺した詩篇の数は28と少ない。これらの詩篇は、死後、ナンディノの手によってようやく日の目を見た。クエスタを自殺へと駆り立てた自責の念と自己懲罰へのこだわりは、善と悪の戦いや、死という主題に詩人を導き、それまでにない自由な表現へと向かわせた。またクエスタが編集したアンソロジーは、20世紀初頭のメキシコ詩をうかがい知るための貴重な文献となっている。

さらに、詩人を父にもち、息子も同業者となったエンリケ・ゴンサレス＝ロホは、クエスタと同様、夭折した。若い頃から新聞記者として活躍し、バスコンセロスの片腕として働いた詩人のうちに秘められていた才能が、開花に至らなかったことはかえすがえすも残念なことである。

サルバドル・ノボは、詩人や戯曲家、ジャーナリストとして注目をあびた。ビジャウルティアが「ユリシーズ」誌を刊行したときの協力者であり、演劇集団としての〈ユリシーズ〉においては、戯曲を翻訳したり、舞台監督を務めたり、役者として舞台上に立った。ブエノスアイレスで開催された汎アメリカ会議では、ガルシア＝ロルカと親交を結び、彼の素描集の出版のため尽力した。ノボは、『ジブシー歌集』から靈感を得て『アンヘリジョとアデーラのロマンス』*El romance de Angelillo y Adela* (1934) を上梓している。彼の詩が有するモダンさと重厚さの二面性は、「同時代人」誌に見られる特徴のひとつとなった。

4. 「同時代人」の傾向

それぞれがすぐれた詩人であった「同時代人」グループの中心的な存在として活躍したのは、ビジャウルティア、トーレス＝ボデー、ゴロステイサ、ノボの4人である。彼らは、「この現代に、普遍的な文化を生みだすこと」を標榜した。その糧となったのはヨーロッパと南北アメリカの新しい文芸思潮であり、彼らはそれを懸命にメキシコに伝えようとした。そのため、「同時代人」グループ以外の詩人や作家たちの作品も掲載された。メキシコとその他のスペイン語圏の国々の詩人や作家たちが紹介されたし、英語をはじめとする諸外国語で書かれた作品が翻

訳された。

海外文学は、「同時代人」誌の詩人たちを魅惑した。英語圏ではT・S・エリオットやジョイスといった詩人や作家たち、スペインではファン・ラモン・ヒメネスやビセンテ・アレクサンドレのような〈27年の世代〉の詩人たちに、敬意がはらわれた。なかでもフランス文学は熱烈に支持され、ギヨーム・アポリネール、ポール・ヴァレリー、ポール・エリュアール、ジャン・コクトー、アンドレ・ジード、マルセル・ブルーストラがその機関誌を通じて紹介された。

ことに、ビジャウルティアやトーレス＝ボデー、それにノボ、オーエンは、アンドレ・ジードやマルセル・ブルーストといった、人間の置かれた状況を把握する新しい方法論を模索した作家たちに傾倒し、散文で作品をものすることに挑んだ。そうした作品は、当時のメキシコで流行していた写実的な革命小説とは一線を画することになった。オーエンの『雲をつかむような小説』*Novela como nube* (1928) や、ビジャウルティアの『心の淑女』*Dama de corzaones* (1928) のような短編小説は、夢や神話を題材にし、現実がいかに脆弱なものであるかを暴き出した(ただし、トーレス＝ボデーのほかは、このジャンルに多くの作品を遺していない)。これらの作品においては、出来事が空間的、時間的に整理されずに断片として提示されている。多様な語り手たちの視点が用意され、新しい小説の方法が模索された。そうした斬新な方法は、『石蹴り遊び』のフリオ・コルタサルや、カルロス・フエンテスやバルガス＝ジョサ、それにガルシア＝マルケス、ホセ・ドノソといった'60年代以降の、いわゆるブームの作家たちが用いた実験的な方法と軌を一にしている。

しかし、メキシコとラテンアメリカの文学に与えた影響の大きさにもかかわらず、「同時代人」誌の前衛主義的な傾向は、当時のメキシコでは広い支持をえたとは言えない。それには、メキシコという国がまだ革命を達成したあとのほとぼりがさめていなかったことが関係している。しかし、「同時代人」グループが海外文学の影響を受け入れたのは、表面的な外国かぶれのせいではない。「同時代人」誌が海外の作品から貪欲に学ぼうとした背景には、アルフォンソ・レジェスが唱えたように、メキシコを世界に向けて、世界をメキシコに向けて相互に開放することにより、真の「アメリカ大陸の知性」*inteligencia americana* を生み出そうとする渴望があったからである。しかしながら、国民全体がナショナリズムに傾斜し、国粹主義的な文化のありようを称揚する空気が濃くなっていくなかで、海外文化を積極的に受容するという姿勢は、現実逃避やエリート主義のそしりをまぬかれなかった。レジェスや「同時代人」の若いグループは、まことに不当なことながら、愛国主義者を名乗る連中から〈恩知らず〉として誹謗された⁵⁾。

そうした中傷の原因となったのは、「同時代人」誌がメキシコ革命にたいして明確な関心を示さなかった点にある。「同時代人」の誌面を飾ったのは、文学的・哲学的な論評が中心であった。したがって、ペジセルとノボの二人を除けば、革命的な主題を取りあげようという意図は、「同時代人」誌にはほとんど見られなかったのである。革命を称揚する作品を載せる代わりに、「同時代人」誌は、厳しい美学的規範にのっとり純粋な詩の創造を目指した。こうした雑誌

の特徴は、詩人たちを身近な政治的・社会的テーマの実践から遠ざけることになった。この点において「同時代人」誌の姿勢は、政治的・社会的な論争をいとわなかったエストリデンティスモの信奉者たちと本質的に異なっている。

国家や民族の価値観に見向きもせず、普遍的な美学を求めたために非難をあげられるという経過は、造形芸術の分野でも見られた。国家的事業であった壁画運動をくり広げたりペーラやシケイロスという画家たちと、もっと個人的な主題で絵を描き、タブロー画家と見なされたルフィーノ・タマーヨとの関係がこれに似ている。とはいえ、タマーヨの場合と同様、「同時代人」のグループが非政治的な態度をとった責めは、一方的に彼らに帰される性質のものではない。パスがこのグループについての論考で指摘しているように⁶⁾、革命家たちにたいする不信とそのプログラムへの不満が背景にあったのである。「同時代人」誌の詩人たちは、メキシコ社会の現実と折り合いをつけることができず、エロティシズムや夢や死という個人的な世界に身をおき、孤高を持した。ビジャウルティアの仕事を訪れて、まるでジャン・コクトーの映画のセットのなかに踏みこんだかのような驚きを覚えた、とパスが述べているとおりである⁷⁾。一方、ビジャウルティア自身は「メキシコの現実を耐え忍ぶには、こうした人工的な避難所をこしらえるほかになかった」と言っている。さらに、〈マチスモ〉machismoと呼ばれる男性優位主義が幅を利かせる社会で、ビジャウルティア、ノボ、ベジセルが共有した同性愛の趣味も、彼らの人格への攻撃と作品にたいしての厳しい批判を招いた。

しかし、「同時代人」誌のなかで、批評がまったくおこなわれていなかったわけではない。この分野では、ビジャウルティアとクエスタ、それにサミュエル・ラモス Samuel Ramos (1897-1956) の3人の才能が傑出していた、と前衛主義とのかかわりの深いグアテマラ出身の作家、カルドサ＝イ＝アラゴン Luis Cardoza y Aragón (1901?-1992) が語っている。彼らはとくに絵画に強い関心をいだき、リペーラのような同時代の画家の仕事についてよく論じた。一方、ヨハン・ゴットフリート・ヘルダーの文学理想を受け継いだラモスは、メキシコ的なもの、メキシコ文化の源泉的なものについて詳細かつ綿密に論じたが、そこにはいささか悲観的な調子が含まれていたことは見逃せない。“Somos una manada de fieras hambrientes. El humanismo aparece hoy como un ideal para combatir la infrahumanidad engendrada por el capitalismo y el materialismo burgueses.” 「われわれは腹をすかせた獣の群れだ。今日、ブルジョア的な資本主義と唯物論によってもたらされた非人間性とたたかうための理想として、人間中心主義が浮かび上がる」⁸⁾。ラモスによるこの真摯な考察は、パスの『孤独の迷宮』*El laberinto de la soledad* のようなメキシコ論へと確実につながっていくものである。それとともに、「同時代人」誌が、審美的な価値をひたすら優先し、メキシコの現実を軽んじたり、逃避したりしていたという見方が一方的なものであったことを示している。

5. 結び——「同時代人」誌がえがいた詩のゆくえ

「同時代人」誌のもっとも関心を寄せた対象が、詩であったことはまちがいない。創刊から休刊までのあいだに、さまざまな執筆者によって寄稿された批評を突きあわせてみるとそれが分かる。

トーレス = ボデーは、1928年に発表された「新しい詩」⁹⁾と題する文章で、同時代の詩の行方について省察をおこなっている。そのなかで、トーレス = ボデーは、文学全体が危機にさらされていることを認めながら、しかし、死にかけているのは詩だけにとどまらず、深刻な懐疑主義に陥った文明精神そのものであり、その元凶は実証主義にはかならないと主張している。さらに、高踏派、象徴主義、ダリオのようなモデルニスモの詩人たちを点検したうえで、従来の頹廢したロマン主義を乗り越えた同時代の詩を生み出す必要性があることを訴えた。“A través del poema se sienten los andamios que el artista no tuvo tiempo de destruir. El lector atento podría hacer, dentro de cada uno de ellos, la historia de una emoción romántica y su tránsito al esquemático juego de inteligencia en que se realiza. Lo que era aritmética, número lleno de sugerencias y de promesas, se ha ido trocando en álgebra, fría ecuación de astucia.” 「詩を通して、芸術家に崩す暇のなかったさまざまな足場があることが感じられる。注意深い読者ならば、それぞれの裡にロマン主義的な感動の物語を作り上げ、その感動が成就される図式的な知の遊びへと移し変えることができるだろう。算術的なもの、つまり暗示と約束で満たされた数字であったものは、代数学に、狡知の冷たい等式に転じてしまった」。トーレス = ボデーは、ここで示されたような変革の意思が、まだ不完全なものであるにしても、ジャン・コクトーやルヴェルディ、ヘラルド・ディエゴ Gerardo Diego (1896-1987) やアルベルティ Rafael Alberti (1902-1999)、フェルナン・シルバ = バルデス Fernán Silva Valdés (1887-1975) やオリベリオ・ヒロンド Oliverio Gironde (1891-1965) といった詩人たちの作品に見出せるとしている。

翌1929年5月の第4号に掲載されたオルティス = デ = モンテジャノの「詩の本質」*Suma de Poesía*と題された文章は、トーレス = ボデーの記事よりもはっきりとした言葉で詩を定義しようともがいている。“Ayer las palabras servían al poeta para *limitar* una idea — emoción, sensualidad o viaje — y ahora le sirven para *construir* siempre dueñas de su perfume esencial. Ya no sugieren, *definen*, y, necesariamente, habrá que tomarlas en su más justo, profundo, sentido. Así cuando el lector dice: no entiendo, querrá decir: ignoro la significación exacta de las palabras; el poeta habla un lenguaje que no es usual o, bien las palabras no representan lo mismo para él que para mí.” 「昨日まで、詩人にとって言葉は、ある観念を——感動、感覚、あるいは旅を——規定するのに役立つが、今日では、その本質的な香気の

支配者たる言葉をつねに形成するのに役立っている。もはや言葉は暗示するのではなく、定義する。必然的に言葉は、もっとも正しく、もっとも深い意味で理解されなくてはならないだろう。したがって、読者が「よく分からない」というとき、それは「言葉の正確な意味を知らない」といっているのである。詩人は通常の言語とは異なる言語をもちいる。つまり、言葉が詩人にとって意味しているものと、わたしにとって意味しているものと同じではない。

さらにオルティス＝デ＝モンテジャノが、1930年7月から8月にかけての26・27合併号に、「詩の読者による覚え書き」*Notas de un lector de poesía* という文章を書いている。このなかで、彼は、ヴァレリーやルヴェルディへの言及とともに、ブルトンが提示した方法論をとりあげている。そこには、シュルレアリスムが探究した詩的イメージの補足の方法を支持し、二つの異なるイメージの出遭いがもたらす〈火花〉を〈純粋な精神〉による創造であるとして受け入れる態度がうかがわれる。

メキシコの前衛主義の歴史において、「同時代人」誌に先立つエストリデンティスモはいわば過激な伝道者であった。「同時代人」誌には、すぐれた才能をもった詩人が集い、作品を書いたり紹介したりした。同誌は、言ってみれば、前衛主義を熟成させるための土壌の役目を果たしたのである。たとえば、マプレス＝アルセの作品も含まれているが、1928年にクエスタによって編纂されたメキシコ現代詩のアンソロジーは、「同時代人」誌がそのような明確な意図をもって活動をおこなっていたことを物語っている。パスだけではなく、エフライン・ウエルタ Efraín Huerta (1914-1982) や、アリ・チュマセロ Alí Chumacero (1918-) といった多くの後継者と支持者らを得たという点を考えると、「同時代人」のグループはエストリデンティスモをしのぐ広範な影響を与えたことは疑いえない。メキシコをはじめとするラテンアメリカにおける文学の発展をたどるときに、「同時代人」誌が1920年代から1930年代にかけて民族主義的な時代の風潮に逆らって、前衛主義文学の誕生を促した意味は、決して小さくなく、と言えるであろう。

Endnotes

- 1) Durán, Manuel. *Antología de la revista CONTMPORANEOS*. México, Fondo de cultura económica, 1973.
- 2) Paz, Octavio. *Los hijos del limo: del romanticismo a la vanguardia*. Barcelona, Seix Barral, 1974, pp.15-35. 参照
- 3) Forster, Merlin H. *Los Contemporáneos 1920-1932. Perfil de un experimento vanguardista mexicano*. México, De Andrea, 1964, pp. 7-8.
- 4) Smith, Verity, *Encyclopedia of Latin American literature*. Chicago, Fitzroy Dearborn, 1997, p.380.
- 5) Stanton, Anthony(ed.). *Correspondencia; Alfonso Reyes / Octavio Paz (1939-1959)*. México, Fondo de cultura económica, 1998.

- 6) Paz, Octavio. 'Contemporáneos' en *México en la obra de Octavio Paz: tomo II*. México, Fondo de cultura económica, 1987, p.94.
- 7) Paz. *ibid.*
- 8) Cardoza y Aragón, Luis. *El río : novelas de caballería*. México, Fondo de cultura económica, 1986. p.380.
- 9) Torres Bodet, Jaime. *Contemporáneos: notas de crítica*. México, Herrero, 1928.

参考文献

- Reverte Bernal, Concepción. *Fuentes europeas : vanguardia hispanoamericana*. Madrid, Verbum. 1998.
- Eladio Cortés (ed.). *Dictionary of Mexican literature*. London, Greenwood press. 1992.
- González S., Julian. *Antología poética de la vanguardia hispanoamericana*. Managua, Distribuidora cultural. 1994.
- Franco, Jean. *An introduction to Spanish-American literature*. New York, Cambridge University Press. 1994.